

ふっ
とんだ
ごちそう



登場人物

ナレーター

竹次郎
たけじろう

喜三郎
きさぶろう

船頭
せんとう



1



2



3



4



5



6



7



8



9



喜三郎

竹次郎

喜三郎

竹次郎

喜三郎

竹次郎

喜三郎

竹次郎

むかし、今の^{しんでんじゆく}新田宿に、竹次郎さんと喜三郎さんという男がいた。二人はたいそうなタバコ好きで、朝起きると顔を洗う前にまずキセルにタバコをつめ、一服する、タバコを離すのは、食事の時位でそのせいで家の中はタバコのおいが年中ただよっていた。あるとき二人は用事があり、江戸へ行くことになった。

「江戸へ行くにはどうでしたっけ。まず新田宿をでてそれから座間の宿を通り。」

「そう、それから芝原（相模ヶ丘）を越えて、鶴間（大和市）で青山街道（国道246）へ出てよ、長津田からえー二子の渡し場へ行ってから。」

「ああ、そうしたら舟で多摩川を渡って」

「そうそう、それから江戸の日本橋までは、まあ十二里位かなあ。」
「まあ、随分ありますね。」

「朝早くでも江戸に着くのはその日の夜、長い道中だ。」
「疲れますね。」

「何言ってるんだこいつ。ただお前と二人だけで何もしねえで歩くの

は退屈たいくつだなあ。」

喜三郎 「そうですねえ。そうだ、どうですかね、どうせ長い道中、楽しみながら行くって言うのはどうですか。何かいい案あんはありませんかね。」

竹次郎 「うーんそうだな。おお、どうかね、二人の好きなタバコの火を江戸へ着つくまで消けさないで行った者ものが日本橋にほんばしで夜のご馳走ちそうをおごってもらうというのは。」

喜三郎 「おお、それはいい案あんですね。せっかくお江戸へ行くんですから、おいしい物を食べたいですからね。」

竹次郎 「いつだったかよ、庄屋しょうやさんと一緒いっしょに行ったときゃあ、おめえ晩ばんめしになあ、ソバいっぺいしか食くわしてもらえなかつたなあ。」

喜三郎 「そうそう、庄屋さんけちなお人よなかですから。私はあの日夜中よなか目がさめて、全然ぜんぜん眠ねれませんでしたよ。」

竹次郎 「おおっ！江戸に着いたらよ！江戸の名物めいぶつのアナゴの天ぷら、にぎり寿司ずし、新鮮しんせんな刺身さしみ、思おもっただけでもヨダレが出でそうだけえ。」

喜三郎 「ええ！それにおいしい酒のを一緒に飲のんだら、まあ最高の晩ばんめしに



なりますねえ。」

ということ、二人は江戸でのごちそうを大変楽しみにして朝早く村を出たのであります。二人の吸うタバコは、キセルにつめて吸うきざみタバコで、続けて吸う時は、吸ってしまった残りの火を手のひらにはたき出し、その火をまたキセルにつめたタバコに移し、また吸うのであった。二人は火を消さないように気をつけながら歩いていた。

喜三郎

「竹さん、江戸で用事が終わったらどうしますか。」

竹次郎

「そうだなーおめーすぐに帰らなきゃなんねえのか。」

喜三郎

「いや別にいいそいで帰らなきゃならない用事はありませんが。」

竹次郎

「そうか、だったらよ、浅草の観音様も拝みたいし、芝居小屋もの

ぞきてえしな。吉原のおいらんも見たいし。」

喜三郎

「そんなにあそこもここも行かれませんか。」

と、たわいのない話をしていても二人は

竹次郎

「絶対に江戸までタバコの火を消さないで行くからな。」

喜三郎

「ええ、おいしいご馳走は私がもらいますよ。」



と心の内で思っていた。

村を出てなんとかタバコの火も消えず多摩川の二子の渡し場に着了た二人、ほっとした表情で、

喜三郎 「やれやれ、タバコの火も消さずに船着場に無事着きましたね。」

竹次郎 「川を渡りや日本橋まではもうひとつきりだ。さあ乗ろうぜ。」

喜三郎 「今日も舟は混んでますね。」

竹次郎 「お、ここが座れそうだ。」

喜三郎 「あいててよかったですね。」

竹次郎 「向こう岸に着くまで足を伸ばしていくべえ。」

船頭 「舟が出るぞー乗る人は急いでくれー。」

船頭は、なれた手つきで舟を漕ぎ出した。天気も良く川風が気持ち良く吹いていた。

喜三郎 「川が荒れてなくなつてよかったですね。足止めをくらつたら大変ですからね。」

竹次郎 「そうだよな。天気もいいし、今日はついているぜ。きっと江戸での夜のご馳走は食べられそうな気がするよ。」



喜三郎

「お、竹さんあれを見てください。ほら、富士のお山がきれいに見えますよ。」

竹次郎

「そういえば江戸は今桜さくらが見頃みごろと聞いてきいるだ。」

喜三郎

「私も聞きました。」

竹次郎

「俺おれたちの村の秋の景色もいいけどよ。どうせ江戸まで行くんだから花見でもするか。」

喜三郎

「花見をしながら一杯やるのもいいみやげ話はなしになりますねえ。」

と、話している内に川の中程なかほどまでに舟は進すすんで行った、その時、喜三郎さんがタバコをつめ替かえようと手のひらにポンとはたきだししたが、川風に火が吹きとばされ

喜三郎

「あつ、ー」

という間もなく川の中へ落ちてしまった。舟の中ではないので、拾うことができない。

喜三郎

「あつっー、なんてこった。ここまで消きえないで来たタバコの火が川の中へ落おちるだなんて。アアア。」

竹次郎

「やったー、ご馳走はオレのものだぜー。」



竹次郎

とほくそえんだのもつかの間、今度は竹次郎さんのタバコの火が川風に吹き飛ばされ川の中へ。

「あ！なんてこった。おれのタバコの火までが。」

と口惜くやしがった。これで二人共タバコの火がなくなってしまった。

舟を下りた二人、がっかりした表情ひょうじょうで、

「あーあー、タバコの火だけでなく！」

「期待きたいしていたおいしいご馳走ちしんまで！」

「ふっとんでしまったあ！」

竹次郎

二人

喜三郎

おしまい。